

# ヘルダーリンにおける「近代」

山元哲朗

The modernity in Friedrich Hölderlin

Tetsuo YAMAMOTO

## (一)

ドイツ文学史上ヘルダーリンは、ゲーテやシラーに代表されるヴァイマル古典主義とそしてロマン主義との中間に立っている。このことは、何れの文学サークルにも属さず、孤独、孤高、やがて精神の薄明の世界に身を沈めていった、後期（1801年～）のヘルダーリンにあっては殊更に顕著であろう。

古典主義とロマン主義を区分する指標の一つとして、古代ギリシア文明と如何にかかわっているかを見ることは欠かせぬ要件である。この点においてもヘルダーリンは、極めて特徴的な独自の様相をうかがわせる存在であると云えよう。

「古典主義が永続的な姿へと形成しようとした“生”が、ロマン派にあっては、果てしなく流動する個別的運動へと戻し変えられた。」と、マルティニーは労作『ドイツ文学史』<sup>1)</sup>の中で述べている。個別的・个性的変容のエネルギーをロマン派が求めたとするなら、そこには、彼等と離れて、“中世回帰”ならざる古典ギリシアの世界に飛翔を試みた、一個の精神の存在を見逃すわけにはいかない。

世紀の一大転回期にあって、ドイツ古典主義とロマン主義運動の渦中に立つヘルダーリンが、古代と近代の問題に何如なる立場から取り組み、自らが生きる時代の文芸の可能性をどのように見ていたのかを、後期の思索のあとを手がかりとして確認していきたい。と同時に、近代固有の文芸の創造に、それぞれ独自の方法で立ち向かっていった初期ロマン派の人々

---

平成17年2月28日 原稿受理

大阪産業大学 教養部

1) Fritz Martini. Deutsche Literaturgeschichte. Alfred Körner. 1961.

が、彼等の指標の一人とも目していた詩人ヘルダーリーンを、どのように受容していたのかをも省り見ながら、ヘルダーリーンにおける“近代”の問題に焦点を当て、若干の考察を試みるものである。

## (二)

1798年12月31日夜、ヘルダーリーンは弟カールに宛てて一通の書簡を認め始めた。マルクグレニンゲンの書記の職に就いていたカールが、ニュルティンゲンの母に仕事上の不満を訴えていたらしく、それを知った兄である詩人の愛情と教訓に満ち溢れた書簡は、傷心の弟をどんなに力強く慰撫し、励ましたことであろうか。

ジルヴェスターの鐘の音に一旦ペンを擱き、翌日、つまり新年元旦にひき続き書き加えていったので、当時の多くの書簡の中では一番の長文となっている。当今の主要な問題に触れながら、余すところなく詩人の考えが語られている、重要な書簡の一つである。

信じておくれ、落ち着いた理知<sup>2)</sup>は、この世の戦いの中で、心臓を毒矢から守る神の楯なのだ。

先ずは事態を冷静に見つめ、軽挙妄動を慎むように諭している。そして、自らの若き日の体験を語りながら、愛する弟の自重を強く求めているのである。

ぼくは、最愛のカールよ！ 実にその半ばまでも、憂鬱と迷誤のうちに失った青春、しかしおまえにはまだ消耗されずに残されている青春をふり返ってみるとき、どんなに沢山のことをおまえに、しばしば血をもって、書きしるしたく思うことだろう。辛酸をなめ、厳しい困苦に堪えて切り抜けてきた者が、自分の愛する者にはもっと容易に事が運ぶようにと願わないとしたら、それはおかしいことだろう。そもそもわれわれは、運命を自分のためによりもはるかに、自分の心にいとしいと思う者のために、恐れるものなのだ。

折しもの鐘の音に、詩人は敬虔な祈りをささげ、床に就く。

---

2) 1797年2月16日付ノイファー宛書簡の中で、ヘルダーリーンは次のように云っている。(前略)  
「ヘーゲルとの交際は僕には非常にいい影響を与える。僕は落ち着いた理知家たちが好きだ。自分とか世界とかの関係がいまどんな場合に当たるのかよくわからないときには、彼らのところへ行けば啓発されるから。」(後略)

いまちょうど真夜中の12時を告げる鐘が打っている。そして1799年が始まる。最愛の者よ、お前のため、そして、ほくたちすべての家族のため、幸多き年であれ！

そしてまた、ドイツと世界のため、あらたなる偉大な、幸多き世紀であれ！ それでは、これから眠ることにする。

翌日、あらたな思いで新年を迎えたヘルダーリンは、当節のドイツ人が寄せる関心事について、主として以下の三点に関して熱っぽく語りかける。

哲学的小よび政治的読書がわがドイツ国民の教養におよぼす好ましい影響は、疑う余地がない。そして、おそらくドイツの国民性にとっては、もしほくが、ほくの極めて不完全な経験ながら、そこから正しい結論が描き出されていると仮定することが許されるなら、まさにこの両方面からの影響こそ他のどんな影響にも増して、第一に必要なものであったのだ。つまりほくは、ドイツ人の最も普通の美德と欠点は、かなり偏狭な家庭生活に還元されうると信じる者なのだ。

“偏狭な家庭生活”に起因するのは、たいていの者がなんらかの仕方で、文字通りに、あるいは比喩的に、彼らの土地に繫縛されているからだと論じ、覚醒を促す。

誰もが自分の生まれた所に住みついてしまって、興味や想像を活動させて、そこから越え出ることも、越え出ようとすることもめったにしないのだ。このことから、あの弾力・衝動・諸力の多様な展開の欠如が由来しているのであり、このことから、小心翼翼と守っている彼らの狭苦しい領域<sup>3)</sup>からはみ出しているすべてのものを、あの陰鬱な拒否的なものおじ、もしくは、臆病で卑屈な、盲目的跪拝のなかで受取るという態度が、由来しているのだ。このことからまた、公共の名誉と公共の財産に対する冷淡さも由来しているのだ。もっともこの冷淡さは、近代の諸国民に極めて一般的な現象なのだが、しかしほくの判断では、ドイツ人の間に、特に著しく見出される傾向なのだ。自由な広野にあって生き生きと活動する者のみが、自分の居間にも安住するように、普遍的な意識と世界への開かれた眼差しがなければ、個性的な、各人に固有の生活もまた存立することが出来ないのだ。

---

3) 『宗教について』という断章(論考)のなかで、次のように述べている。(前略)「多くの人間が共同の領域—そこで彼らが人間的に、というのは必要に縛られた状態よりも高いところで活動し苦悩する領域をもつ限りにおいてのみ、ただその限りにおいてのみ彼らはひとつの共通の神性を持つのだ。」(後略)

ヘルダーリーンが見るところ、現今のドイツには、ドイツ人には、この重要な両者、即ち、“普遍的な意識”と“世界へ開かれた眼差し”がともに絶滅している、と云うのである。それに比して、各人が自分をとり巻いている世界に精神と魂を持って所属していた古代人のもとでは、個々人の性格や環境の中に、現存のドイツ人におけるよりもはるかに深い親密性が見出せるのだ、とタレスやソロン<sup>4)</sup>をその良き例として語り、それとは逆に、魂の欠けた世界主義や仰々しい形而上学の気取った叫びの愚かなること、不実・不毛なることを強く戒める。タレスとソロンの二人が、諸国の国家制度を調べ、世界の哲学者達と知己になるために、相たずさえてギリシア、エジプト、アジアを遍歴したこと、そして彼等二人が眞に良き友人同士であり、人間的な、大変素朴な関係を理想の姿として称えるのである。では、こんにちのドイツはどうか——何を為すべきか——何によってこの閉塞状況から脱し切れるのか——何によって救われるのか——ヘルダーリーンの言に耳を傾けよう。

さて、大部分のドイツ人は、あの小心翼翼と守られている偏狭な状態に留まっていたから、彼等の経験することの出来た影響のうち、極端なまでに関心の普遍性に突進し、人間の胸中に無限への努力を開発する新たな哲学の影響ほど、有益なものではなかったのだ。なるほどこの哲学はあまりにも一面的に、人間本姓の偉大な自発的活動を支えとしているが、しかし、時代の哲学として、まったく唯一可能な哲学なのだ。

カントは、ドイツ人をエジプト的弛緩から、自分の思弁の自由で孤独な荒野に導き、神聖な山から強力な法則をもたらす、わが民族のモーゼ<sup>5)</sup>である。もちろんドイツ人はまだ依然として、自分らの黄金の子牛のまわりを踊って、その肉鍋<sup>6)</sup>に垂涎している。そこでカントがドイツ人を引き連れて、比喩的な意味ではなしに、本当に何らかの孤独境へ移住するののであれば、ドイツ人は、自分自身の生命に満ちた、よりすぐれた本姓を閉じこめて、牢獄深くつながれている囚人のように、この本性を人知れず嘆息させている、あの自分たちの食欲への礼拝と、魂と意味とを失った死せる慣習や俗説から、脱却するこ

---

4) タレス（キリスト紀元前624-547）イオニアのミレトスの自然哲学者。ソロン（紀元前634-560）アテナイの立法者。ノイファーの年刊（1800年号）のために、1799年夏に計画されたヘルダーリーンの論文『タレスとソロンとプラトンの生涯と性格』の萌芽を明らかにしている。ヘルダーリーンの出典は、彼が当時読みふけていたディオゲネス・ラエルティオスのタレスに関する章であった。

5) カントに対する彼のこのような高い評価は、シラーの『優美と尊厳』のための類似の評価と対照的に比肩しうものと云えよう。

6) Freischöpfle すなわちまたエジプトの饗宴をも意味するものであろう。（出エジプト記16の3）

とは出来ないだろう。

以上が先述の要件の一、哲学的読書に関する記述の概略の紹介である。ひき続いて要件の二、政治的読書に関する記述が、前段のすぐ後に次のように続いている。

政治的な読書もまた他の面から、全く同様に有益な作用を及ぼさずにはいないのだ。特に現代の諸現象が、専門的知識からの力強い叙述によって眼前にもたらされる場合には、人々の地平は拡大する。そして、日々に世界へ向けられる眼差し共に、世界に対する関心もまた生じ、増大する。広汎な人間社会とその偉大な運命とを閲覧することによって、普遍的意識と自分の狭苦しい生活圏からの超出は、ちょうど関心と視点とを普遍化させる哲学的要求と同様に、大いに促進させられることは間違いのないことである。

ここでヘルダーリンは、大変興味深いことに、部隊における軍人の例を挙げる。つまり、部隊と行動を共にする時に、軍人が常よりも勇氣と力が増すのを感じ、事実またそうなるように、本来人間の力と活動性は、行動を共にし、苦難を分け合っていると感ずることの出来る生活圏が拡大するのに比例して、増大するのだ、と云うのである。まことに分かり易く、小は家庭から、大は国家に至るまで、あるいはそれを越えて、あらゆる運命共同体に共通普遍の認識と云わねばなるまい。弟カールは、その胸にしっかりと受けとめたに違いない。『ヒューペリオン』の作者、兄の書簡——この書簡そのものも、他の書簡と同様に重要な文学作品である——は愈々佳境に、最後のテーマに向かう。

それにしても、哲学と政治に対する関心は、現在みられるよりもっと一般的で真剣であっても、これのみではまだ決して、ドイツ民族の教化にとって十分ではないのである。願わしいことは、芸術、特にポエジーの品位を、これにたずさわろうとする人々の側においても、これを享受しようとする人々の側においても、貶しめているところの限りない誤解がやむことであろう。人々の教化に及ぼす諸芸術の感化については、既に多くのことが語られてきたが、しかしその場合常に、誰もがこのことに対して真剣ではないかのようにみえた。そしてこれは当然なことであった。何故なら、芸術が、特にポエジーがその本性上何であるかを、人々は考えなかったのだから。

そこでヘルダーリンは、人々が芸術（作品）の外面にのみとらわれ、それを芸術そのものと解そうとする、陥り易い過ちに目を凝らす。そして、その外面も芸術の本質と深いかか

わりを持つものだが、芸術の全性格をなすものではない、と説く。さらに、芸術は遊戯のつましい姿 (die bescheidene Gestalt des Spiels) をとってあらわれるものだから、遊戯と解されたのだ、との大変味わい深い表現で分析する。

だからまた、芸術から、遊戯の作用、即ち気晴らし以外のものが、何ひとつ生じ得なかったのも、当然なことである。しかしこれは、芸術がその真の本性において存在する場合に芸術が実行するものとは、まるで正反対のものである。何故なら、この場合には、人間は芸術のもとで魂の静謐を得る<sup>7)</sup>のだし、芸術は人間に平安を、空虚な平安ではなくして、全ての力を活動させ、ただ諸力の親密な調和の故にのみ活動的とは気付かれないだけの、生命に満ちた平安を、与えるのである。芸術は人々を互いに近づけ、結合させる。しかし、各人が自分を忘れ、誰からもその生き生きとした独自性が出現しないという仕方では、人々を結び合わさない遊戯のようにではなく。

ヘルダーリンはここでカールに、この書簡が遅れたことと、極めて、断片的であることの許しを乞うている。また、昨年末の母からの書簡で依頼されていた、母方の祖母の誕生記念に寄せる詩<sup>8)</sup>の創作にあたって—書簡を受取ったその日の夜には殆んど仕上げていたのだが—、いつになく異常な気持ちになり、寝つくことも出来ず、翌日も容易に気を鎮められなかった、と打ち明けているのである。大変興味をひく内容である。詩人の言によれば、こうである。

ぼくがそこで掻き鳴らした音調は、極めて力強くぼくの内部で反響し、幼い頃からこれ迄に経験したぼく的心情と精神の転変、ぼくの生活の過去と現在が、その際余りにもありありと感じられたので、それからは寝つくことが出来ず、翌日は容易に気を鎮められなかったのだ。ぼくはこういう人間なのだ。おまえは文学的に大したものではない詩行を眼にして、どうしてぼくがその時こんな異常な気持ちになりえたか、不思議に思うことだろう。しかし、僕がその時感じたものについては、ぼくはほとんどまったく云ってはいないのだ。ぼくがぼくの生命に満ち溢れた魂を、極めて平板な言葉のなかに引き渡して、ぼく以外の

---

7) sich sammelt 精神が集中する、心が落ち着くの意で、本来敬虔派の宗教語に属し、そこに由来しているのであろうが、ヘルダーリンの生活感情や生の問題から有機的に成長してきたものと云えよう。

8) 『敬愛する祖母に』(Meiner verehrungswürdigen Großmutter) 1798年末の作。彼女は1725年12月30日生まれであったので、当時は73才であり、詩人がタイトルに付した72才は思い違いであろう。

者は誰も、それらの言葉が本当に云おうと欲していることに気付かないということが、ほくには一般にたびたびおこることなのだ。

ヘルダーリーンの“心情と精神の転変”と“詩の音調”なる言葉に接すると、当時精力的に書き上げた緒論文の一つ『音調の転移』<sup>9)</sup>や、またその続編とも云うべき『言語表現のための注意書き』<sup>10)</sup>および『詩作様式の相違について』<sup>11)</sup>等を中心に考察する必要に迫られる。先述の「諸論文」は、ヘルダーリーンがあのだイオティーマ体験後に移り住んだホムブルク時代(1798-1800)に、その大半を著したものであるが、当初彼自身が企画した雑誌、仮称『イドゥーナ』<sup>12)</sup>に掲載するためのものであった。意欲的に取り組んだ彼の初の試みは、諸般の条件が整わず、遂に陽の目をみることなく終えてしまったのであるが、これらの論文は従って草稿のままに、未完成の姿をとどめて現在に残されたのである。著名な文献学者バイスナー教授<sup>13)</sup>の献身的な努力によって、難解なこれら美学的哲学的論文の判読・解読・解釈等がなされており、その後も多くの研究者がこれに続いているのであるが、未だに解明されえ得ないものも少なくはない。ヘルダーリーンの思索の本質的な独自性に迫る詩論として、詩作品を確証する表裏一体の関係にある。今後のヘルダーリーン研究に欠かせぬ、重要且つ魅力に富む分野であることに違いない。

### (三)

これら一連の諸論文におけるヘルダーリーンの精細な形式的分析の背景には、詩人の美学的弁証法に裏打ちされた形而上学が漲っている。それ自体が各個独立の存在である作品の素材は、互いに有機的な連関によって生命を通わせる統一体となり、そこに芸術的な性格を獲得して、豊かな芸術作品が生み出される。この「芸術的性格」を獲得する要素としてヘルダーリーンは、素材の「底にあるもの」(基本的音調)は「隠喩」によってこれを得ることが出来る、と述べているのである。彼が『音調の転移』の中で提案した「素朴」「悲壮」「崇高」の三つのカテゴリーが、それらの相互の組合せによって叙事詩や悲劇や抒情詩の特性を形象

---

9) 『Wechsel der Töne』(1798-1800)

10) 『Wink für die Darstellung und Sprache』(1798-1800)

11) 『Über den Unterschied der Dichtarten』(1798-1800)

12) 『Iduna』北欧神話の青春の女神。神々に永遠の若さを与える「りんご」を守る神と云われている。

13) Friedrich BeiBner. 元テュービンゲン大教授。彼の編纂になるヘルダーリーン全集(Grosse Stuttgarter Ausgabe)は畢生の労作。爾後のヘルダーリーン研究にとって必須の教典となっている。

する、というヘルダーリン詩学の根本定理に注目しなければならない。

L・J・ライアの『ヘルダーリンの音調の転移に関する考察』<sup>14)</sup>は、この問題をめぐる精緻を極めた研究の成果として特出すべきものであろう。就中、これら三つのカテゴリーを中心に、組合せの連関性を総合的に円形で図式化して、「隠喩」の果たす重要性を詳細に論述した画期的な研究には瞠目の他はない。多大なる示唆と刺激を与えられたこの労作に拠って、ヘルダーリンの詩作品の解釈に、少なからざる成果を期待し得る筈のものであるが、本稿の目標するところに従い、先に進みたい。

前述の引用文に続いて詩人は弟に、ポエジーに関して最近是非とも云いたいことがあると云う。

ポエジーは人々を遊戯のような仕方ではなしに、結合させるものだ、と、ほくは云った。ポエジーは即ち、それが真正なポエジーであり、真正に作用するかぎり、人々を一切の多様な苦悩・幸福・努力・希望・恐怖と結合させ、世にあるあらゆる見解や過失、あらゆる特性や観念、人々の間にあるすべての偉大さや卑小さと結合させ、しだいに人々を、一つの生きている、千重の分節を持った親密な全体へと合一させるのである。何故ならば、まさにこのことこそが、ポエジーそのものの本質であり、ポエジーの原因でもあればまた結果でもあるべきなのだから。

ポエジーの力、即ちその本質をヘルダーリンはどのようなふうにみていたか、ここに至って如実に伺い知ることが出来るであろう。書簡の前段で語られた哲学的政治的教養は、なるほど人々を基本的な、どうしても避けることの出来ない必然的關係、即ち義務と正義に結び付けはするが、人々の調和のためには、果たして得る余力はなく、そこにポエジーの存在が強く求められているのである。ポエジーこそは、ひとときわ高い尊厳を与えられ、他の如何なる学問芸術よりも、未長く生き残っていくに違いないのである。この書簡の終結まじかにおいてヘルダーリンは、遠きギリシア世界に思いを馳せながら、現実ドイツを見据えての次のくぐりには、強烈な印象を与えずにはおかない。

ドイツ人の中の最上の人々でさえ、たいていは今なおこう考えているのだ。まず世界が見事なシンメトリーになりさえすれば、それで万事申し分なしだ、と。おおギリシアよ、汝の天才性と汝の敬虔さと共に、汝は何処へ消え去ってしまったのか？ ほくもまた、すべての良き意欲を持ちながら、世界のこの無比の人間を、ただほくの行為と思弁をもって模

---

14) Lawrence Ryan. Hölderlins Lehre vom Wechsel der Töne. Kohlhammer. Stuttgart. 1960.



索するばかりだ。そして、ぼくは、鷺鳥のように平べったい足を近代の水につけ、ギリシアの天へ翔け昇ろうとしては、無力にもがくばかりだから、何をし、何を云っても、たいはいはただますます不器用になり、支離滅裂になるばかりだ。このぼくの比喩で気を悪くしないでくれ。拙劣な比喩だが、しかし本当のことなのだ。そしてもしわれわれ近代人に、なお何ごとかが可能ならば、ぜひそれを云って欲しい。

「ドイツ人の中の最上の人々」とは、そもどういふ人達であろうか。同時代の人々も含めてあまねくインテリゲンチヤーに向けられたものであろう。以下の文意からこれを単に諷刺と解するのではなく、ヘルダーリン独自の比喩の前提を強調したものと云える。何よりも自己自身への自戒と覚醒を常に求める、ヘルダーリンの姿勢をそこに見ることが出来るのではないだろうか。

U. ガイヤーは『ヘルダーリン、近代と現在』<sup>15)</sup>と題する論文の中で、この書簡の前掲の箇所を引用して次のように述べている。

私を知る限りヘルダーリンは、“近代”という概念を、それもF・シュレーゲルが提唱した対当(対立概念)“古代—近代”,これをヘルダーリンはおそらく『アテネウム断片』<sup>16)</sup>で知り得たのであろうが、これと全く同じ認識でここでその言葉を一度だけ用いたのである。

ガイヤーの鋭い指摘に虚を衝かれた感であったが、確かに云われてみれば、私の貧しい記憶の中にも見当たらなかった、少なくとも詩作品中には無かったのではないかと云っても全く不十分・不確実なので「ヘルダーリン辞典」<sup>17)</sup>を繙いた。「詩作品編」の中でただ一箇所、しかしそれは自動詞(modern 腐る、徴びる)の現在分詞形で、付加語的用法として使われていたのみであった。つまり形容詞あるいは名詞としての“近代”の使用は、「ヒュペリオン編」にも皆無であった。なお「書簡編」,「エムペードクレス編」,「論文編」は未刊なのでこれらによる確認は出来ないが、筆者自身もこれまで、この語には出会っていない。ガイヤーはさらに、この引用部を凝視し、その一言一句に傾注する。

---

15) Ulrich Gaier. Hölderlin, die Moderne und die Gegenwart. Attempto. Tübingen. 1995.

16) 『Athenäum』(1798-1800)シュレーゲルは兄ヴィルヘルムと共にこれを創刊。初期ロマン派の機関誌的存在となる。

17) 『Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin』I・II. Winfried Lenders. Max Niemeyer. Tübingen. 1983.

時代との厳しい隔絶、情感的憧憬、解釈学上の問題、悟性偏重の錯漠たる現実世界への寂寥感、これらに溢れているではないか。

“さてそこで”と彼は語り続ける。

さてそこで、かのシュレーゲルは、初期の論文『ギリシア文学の研究について』<sup>18)</sup>、これはシラーの論文『素朴文学と情感文学について』<sup>19)</sup>とほぼ同時期に成立しているのであるが、その中で、“文学における古代への接近”を、民族の偉大な力を取り戻すための手段として奨めている。ゲーテ、シラー、ヴィーラントが喚起し、辿った軌跡、そして実にヘルダーも云う如く、イギリス人やイタリア人も同様にフランス人達によって、あの最も優しい感情と最も従順な感受性を秘めた包括的な知識をもってしても、統合を果たし得なかった彼等の軌跡は、極めて特徴的だ。一方シュレーゲルが『アテネウム断片』で求めたものは、「古代と近代」の絶対的の同一性の諸条件を、過去、現在、未来に亘り見つけ出すことにあった。それに対してヘルダーリーンは、かの『ヒュペリオン』を書き上げたのだ。そこには、革命的な試みへの血まみれの、悲惨な挫折感が、古代の民主的な自己規定と偉大な力のもとに立ち戻るべく、彼をして語り手としての悲劇作品創造へと衝き動かしたのだ。彼は、過ぎ去った古への世界に閉ざされたディオティーマの像を構想して、かつては花咲き誇り、そして枯れ果てて行った“世界の青春”を、ひとりあてどなく探し求めて行くのである。

けれどもあなたの太陽は沈んだ。より美しかったあの時は、すぎ去った。

今はただ、寒い夜更けに、激しく風が互いに争うように舞うばかり。<sup>20)</sup>

ではここで、ヘルダーリーンの数多くの書簡の中より、古代ギリシアと近代西洋（近代ドイツ）の比較文化論を述べたものとして、次の二つの書簡に注目しなければならないと考える。何れも親友ベーレンドルフ<sup>21)</sup>に宛てたもので、一つは例のポルドー行きを前にした

---

18) 『Über das Studium der griechischen Poesie』 1796.

19) 『Über naive und sentimentarische Dichtung』 1794 - 1796.

20) 『An Diotima』 1797年作。6行のみの単詩節。その5行目と6行目。G S A. I. S.230.

21) Casimir Ulrich Böhlendorff. (1779 - 1825) イエーナで《自由人団》に加わった熱烈な共和主義者である。1798年11月ラシュタットでシンクレア、ヘルダーリーンと知り合った。↗

1801年12月4日付で、あの方はそのボルドーからの謎に満ちた帰国の後の1802年12月2日付のものである。つまり、ヘルダーリンの生涯の異常といわれる時期にさしかかり、同時に彼の詩精神が最後の、そして最高という燃焼期にはいる最重要の時期であることに目を向けたい。長い旅への出立を前にして詩人は、是非この事は云っておきたいと思えるような、彼の思想の核心に触れるような、そして疑うことなき死生観をわれわれに遺したものと思えてならない。

(前略) 民族的固有性の自由な駆使ほど、学ぶに困難なものはない。そして僕の信ずるところでは、叙述の明快さこそわれわれドイツ人にとって、ちょうどギリシア人にとって天の火がそうであるように、本源的に自然なものだ。ギリシア人が、あのホメロスの沈着さと叙述の才能においてではなくして、むしろ君自身が実際に確保した美しい情熱において、ひけをとらざるを得ないのは、まさにあの困難さの為なのだ。

これは逆説のように聞こえる。しかし僕は再度このことを主張して、君の検討と使用に供したい。本来の民族的固有性は文化の進展の中で、次第にわずかな長所になるだろう。それ故、ギリシア人が次第にあの聖なる情熱<sup>パトス</sup>に不得手になるのは、それがギリシア人に生得的なものであったからである。それに反して、ギリシア人が、ホメロス以来、叙述の才能に卓越しているのは、この非凡な人物が西欧的なユーノーのような冷静さを自分のアポロンの国家の為に略手し、異質的なものを眞実に摂取するに十分なだけ、魂の充実もっていたからなのだ。

われわれドイツ人の場合には、これが逆なのだ。それ故にまた、ギリシア的卓越性からただひたすら芸術の諸規則だけを抽出するのは、極めて危険なことである。僕は長い間この事に苦しんで来た。そして今分かっている事は、ギリシア人とわれわれのもとで最高でなければならぬもの、即ち、生命<sup>いのち</sup>に満ちた関係と技倆をほかにしては、われわれは何ものもギリシア人と同等にもつ事が出来ないという事である。

しかし、自己固有のものは、異質的なものと同様に、よく学んで知る必要があるのだ。それ故ギリシア人はわれわれにとって欠くことの出来ないものである。ただ、われわれは、われわれに固有のもの、民族的固有性においては、むしろギリシア人に及び得ないだろう。何故なら、既に述べたように、固有なものの自由な駆使ほど困難なことは無いのだから。

君が劇をむしろ叙事詩風に処理したという事<sup>22)</sup>は、君の恵み深い守護霊<sup>ゲーニウス</sup>が君に与えた

---

1799年4月にホンブルクに赴き、6月末頃まで滞在、交流を深めた。彼はヘルダーリンを敬愛してやまず、両者の間に交された書簡もまた大変重要である。

22) このことによって民族的固有性、即ち、“冷静さ”への方向がとられた、とみられる。

霊感なのだ。僕にはそう思える。この作品は、全体から見れば、純然たる近代悲劇である。何故なら、われわれ近代人の悲劇性は、われわれが全くおとなしく、何らかの容器の中へ押し込まれて、生命に満ちたものたちの国から立ち去るという事であって、われわれが焔に狂って焔に焼かれ、その罰を受けるという事ではないのだから。

そして、これは眞実だ！ 前者も後者も同様に、魂の奥底を揺り動かすのだ。前者はなるほど荘大な運命ではないが、しかしいっそう深刻な運命であって、気高い魂は、このような死に方をする者にも、恐怖と同情を注いで同行し、精神を憤怒のうちに高めておくのだ。事実また、われわれの近代的な運命に従って死のうが、あるいは、古代的な運命に従って死のうが、詩人がこの死を、彼がなすべきように叙述した限り、死すべき者の没落に訪れる最後の思想は、荘嚴なユピターにはかならないのだ。

彼がここで強く主張しているのは、「自己固有のものは異質なものと同様に、よく学んで知る必要がある。それ故ギリシア人として具現している“異質なもの”は、ドイツ人であるわれわれにとって不可欠である。」という点である。

古代ギリシア人と同時代としての近代西洋という時間的要因と地理的要因を共に包含する二極を規定することにより、一方では近代と古代の問題が、もう一方ではドイツ民族とギリシア民族の問題が同時に検討されているのである。こうした問題設定それ自体は、ヴィンケルマンに始まる古代ギリシアと近代西洋の対比をそのまま受け継いでいる。

更にまた、ホメーロスを例証として、「近代のドイツ人にとって“固有のもの”である“叙述の明晰さ”が、ホメーロスの時代に存在していた。」とするヘルダーレーンの相関的な対象把握の姿勢に注目しなければならないだろう。

さてフランスでの種々の体験を経た一年後の書簡で、ヘルダーレーンはどのように語っているのであろうか。興味深いところである。

(前略) 南の国の人間達の競技的形姿は、古代精神の廢墟の中にあって、僕にギリシア人の固有の本質を教示してくれた。僕はギリシア人の本性とその叡知を、彼等の身体を、その風土の中で育て上げられた特質を、強烈なエレメントの力に対して剛毅な精神力を保護した彼等の規則を、学び知ったのだ。かくしてギリシア人達は、ギリシアの意味における最高悟性が反省力であるという限りで、彼等の生き生きと出現する個性的特質を有しているのだ。このことは、われわれがギリシア人の英雄的身体を理解する時、われわれに明瞭になる。われわれの国民性が冷静であるとすれば、ギリシア人のそれは感じ易さである。

(後略)

ここにおいて、この二通のペーレンドルフに宛てた書簡の内容をよく吟味考察し、総括すべき必要がある。即ち、「異質なものを真に自分のものとするに充分なほど魂が充実していた」ギリシア人は、「異質の諸性質を受け入れること」の出来る国民であり、こうした開かれた姿勢を維持することによってのみ、失われつつある「固有のもの」が獲得出来るのである。古代ギリシアと近代西洋とは全く逆の経緯を辿るのであり、この自己喪失と自己獲得を既に経験したのものとして、ギリシアは「不可欠」の意義を持つことになる。即ち、近代ドイツにとって「固有のもの」が、そこでこそ豊かに花開いているからにはほかならないのである。

#### (四)

小説『ヒューペリオン』において、ベラルミン（ヘルダーリン）が激しい口調で行ったドイツ批判の背後には、祖国ドイツに寄せる深い愛と、その愛を裏切る悲痛な現実としてのドイツの姿がある。近代ドイツの惨状を憂うこの「苛酷な言葉」は、理想郷としての古代ギリシアへの想いと、その理想と現実の間のあまりにも大きい乖離による失意にあるといえよう。そこでヘルダーリンは、過去の文化遺産である古代ギリシアと対峙する姿勢で、同時代の固有の文化が成立し得るかどうかが、その可能性の問題に答えようと試みるのである。

つまり、ヴィンケルマン的な彼我一体化の構想から離れて、積極的に新たな「祖國的」文化の萌芽を見出し、それを育成しようとする創造的前進へと立ち向かわせるのである。

では、ここで、ヘルダーリンの諸論文の中で、「祖國的芸術形式」に触れる重要な記述がみられる『アンティゴネーへの注解』<sup>23)</sup> からその一部を引用する。

(前略) ソフォクレスがそのようにしたこと（クレオンとアンティゴネーとの間の対立を政治的・共和主義的に解決しようとしたこと）は正しい。彼が表現したことは、彼の時代の運命であり、彼の祖国の形式なのである。美化・理想化は、しようと思えば出来るだろう。例えば最善の時期を選んで、それを芸術化することも出来よう。しかし祖国に行われている諸観念は、少なくともその列序の点では、詩人が世界の縮写的表出を志す以上、彼の手によって変更を加えられることは、あってはならぬのである。現代のわれわれにとって、このような形式は極めて有効なものである。もともと、国家の精神のように無際限なものは、不完全な視点から捉えるよりほかに捉えようのないものであるから。それにしても、現代の詩人達は祖國的な形式（そういう形式があるとして）を、他の形式をにおいて選ぶべきである。何故ならそういう形式は、単に時代精神を理解するために存在するばかり

---

23) 『Anmerkungen zum "Antigone"』 (1798-1800)

でなく、その時代精神が一度把握され学ばれた以上は、それを確保し、それを的確に感ずるために存在するものだからである。<sup>24)</sup>

ここに、近代固有の文芸の一形態としての、この新たな祖國的形式獲得へのヘルダーリン最後の格闘が始まるのである。後期讃歌成立の契機は実にここに在る。

即ち、相互に異質の固有性をもつ近代と古代を同一視し、双方の異質性を等閑視して、一方を他方の文脈の中で再現することが無意味なものであると認識した結果、導き出されたものであり、同時に、古代の文芸とは異質の文芸、その素材が私たちの世界観に従って選ばれべき時代に応しい言語芸術としての、“私達の文芸”が存在しなければならない、との決意を、実践的に証明するものにほかならないであろう。

このことに関連して想起されるのは、ミュラー・ザイデル教授がその著『文芸作品評価の諸問題』<sup>25)</sup>において述べた次の言葉である。

「もし人間的な意義というものが学問の本質の一部をなしているのなら、その“意義”を、学問そのものの中で、そのときどきの、変化したもろもろの前提から、発見していくことこそ肝要である。その意義とは、ひとつの超歴史的な規範であるが、これは固定しようとしても出来ないものであり、従って、変っていく歴史的生の状況の中から、あくまでもそのときそのとき、あらたに考えぬかなければならないものである。そうすることによってわれわれは、同時に“緊張構造”をとりもどすことになる…」<sup>26)</sup>

“緊張構造”とは著者の最も基本的な学問の理念であり、歴史的な意識と超歴史的な要求との、このような緊張関係こそ、学問とくに精神科学の生命である。これがミュラー・ザイデル教授の根本的な立場であり、これを根底に次の五つの具体的な評価基準が掲げられるのである。

- 一、公的であること (das Öffentliche)
- 二、高次のものであること (das Höhere)
- 三、全体であること (das Ganze)

---

24) 同上論稿の最後尾。

25) Walter Müller-Seidel. 『Probleme der literarischen Wertung』文献(8)参照。

26) ibid.S.32.

四、眞実であること (das Wahre)

五、人間的であること (das Menschliche)

著者の意図するところは、これらの基準概念(評価基準)の新しい意味を問い、今日の立場からよく吟味し、改訂することであろう。つまり、何が公的なのか、何が高次なのか、何が全体であり、眞実であり、人間的なのかを、歴史的意識をもって、文学研究にたずさわる現代の人間として問うこと、このことにほかならないであろう。

そこで、著者のこの概念と先のヘルダーレーンの論旨を仔細に比較すると、そこには、時代を超えて共通の、歴史認識の一致を見出さないわけにはいかない。このことを特に指摘し、さらに、評価という非学問的なテーマに立ち向かう方法的意識の面で、重要な示唆を得たことを付言しておきたい。

さて、ヘルダーレーンの「祖國的文化論」は、初期のF・シュレーゲルの「発展的綜合文芸」の構想と類似性を示すところが多い。シュレーゲルは、近代固有の文芸として「ロマン主義文学」を提唱し、これを『アテネウム断片』の中で、「未だ生成の途上にある、それどころかその固有の性質は、永遠に生成し続けるのみで、決して完成され得ない。」ものであると定義している。つまり「客観的なもの」、「普遍的なもの」を表現する古代の原理とは異質の、「主観的なもの」、「個別的なもの」を表現する近代固有の原理を確立しようとする意志へと向かい、また、永続的に「自己創造と自己破壊」を繰り返す「断片」の集積として継時的に実現されるものとした。従って、古代と近代の双方を同一の時間的延長線上に据えようとする歴史意識に基づいて、近代の固有性を規定しようとする試みは、近代自身のうちに閉じ込めることによって達成出来ないであろう。

この点までは両者、ヘルダーレーンとシュレーゲルは共通の認識に立っているが、そこには両者それぞれの資質に由来する相違が生じて来ることは否めない。シュレーゲルにとって、近代の作品の成立形態である『断片』における「完成」とは、外界との鋭い対立によって内向的に自己完結することで実現される「個別的なもの」の「完成」であって、永続性を持たない。それに対してヘルダーレーンは、あくまで全一的マクロコスモスを即自的に現出させようとする願うのである。

「天上の聖なる者達のために詩人は存在する」と考えるヘルダーレーンは、“しかし詩人達よ”と呼びかけていく。

しかし詩人達よ、私達にふさわしいのは、神の荒天のもとに

頭をさらして立ち、  
父の雷火そのものをおのが手に  
つかみ、その天上の賜物を 歌に  
つつんで世の人々に頒つことだ。

あたかも祝いの日の明けゆくとき……<sup>27)</sup> より

天上の者達に「歌」を介してかわりながら、「天の賜物」を地上に響き渡らせる仲介者となるとき、詩人はその全き使命を果たす。「歌」を贈る天上の者達と、それを聞き届ける地上の者達があって初めて詩人は自らの存在を確かめることが出来るのである。そして、こうした文芸観に支えられて歌われる「歌」は、「人間の共同体」を満たす「民の合唱」となることを願う。「合唱」とは「共同体」の構成員一人ひとりの唱和によって成し遂げられる「合一」を目指す業であり、分裂の危機を常にはらむ近代の自我を、相互に結び合わせる宥和的行為にほかならないのである。

過去の古典的詩形を亅て、「祖国的形式」による近代固有の文学を求めて歌われるヘルダダーリーンの一連の讃歌は、異質の文化であるギリシア語との激しい相剋を経て、新しい命を与えられたドイツ語を媒介として、壮大な詩的世界を構築しようとする意欲的試みにほかならない。特にピンダロスの言語世界との格闘を巡っては、『ピンダロス断片』9篇の訳出と注釈や競技捷利讃歌の翻訳（部分訳も含めて17篇）を通して伺い知ることが出来るであろう。彼の断片の原詩の取り上げた神話的形象と言説をよりどころに、自然と人間界における根源的なことに思いをひそめ、おのが思索を掘り下げていったのである。もとよりヘルダダーリーンの注釈そのものが難解であるが、彼自身の考察を盛り込んだ注釈はそれだけに、視点、あるいは立論の角度にこれまでに見られないところがあり、彼の思想の統一的把握についていっそう考えさせずにはおかないであろう。

かかる観点から、彼の思想の根本をなす、自然観、生命観についていま一度省察しておきたい。ヘルダダーリーンによれば、自然は、個々の生命のありとあらゆる流れが、発しては、また帰ってゆく、全一な創造的基底なのであり、このことは、彼が『ヒュペーリオン』にお

---

27) 『Wie wenn am Feiertage……』(1800) 全7節の詩であるが、三種の草稿があり、文献的に総合すると、尚未完の8行がついており、バイスナーはそれを本文として加えている。ここに引用したものは第7節の3行目から7行目までである。酒を創始したバックスに媒介されて、人間は酒という、危険のない天上の火を飲むことが出来るようになった。そうなったことの根底には、神の威力に直撃されたバックス母子の犠牲的な悲劇がひそんでいる。詩人のなすべきことも、それに類推して考えられてくるであろう。ここにも、ヘルダダーリーンにおける詩人の住務の最も力強い表明の一つを知ることが出来る。



いて、神々しい美の本質を、一般に「多様の統一」とも呼ばれるものと相通ずるものであろう。それはまた、詩人が第一巻の結びの言葉で次のように述べていることから明らかであろう。

神聖な自然よ、お前は、僕のうちにあるも、外にあるも、同じだ。(中略)ただひとつの美のみが、存在するだろう。そして、人類と自然とは、一切を抱擁するところの、ひとりの神において、合一するだろう。

彼の、美の本質解明と自然の全的把握は、続く第二巻の結語として、次のように締め括られている。

世界の不協和音は、愛し合う者同志の諍いのごときものにすぎぬ。争いの眞只中こそ、宥和があり、別れたもの一切は、再び、相互に巡り合う。脈間が分かれては、また、帰って来るのも、心臓においてであり、合一した、永遠の灼熱する生命こそ、一切なのだ。

これは、多くの論者によってしばしば引用されるのであるが、二つの結語は共に、自然、美、神、人類、生命など、すべてをヘラクリートの思考方式により解き明かしてゆく、ヘルダーリン後期の大きな特徴であり、彼の神話的汎神論はここに、最終的な確立をみるに到っている、と云ってよいであろう。

河流を詩った彼の幾つかの詩篇の中でも、『ライン』<sup>28)</sup>はその構成の壮大さにおいても最大のものであるが、彼はこの河流の姿を、自由に、純粹に、生をうけたものの運命として受け取り、詩人の全精神をそこに注いで、故に、具象はそのままに深い意味を実現しているのである。

いまわたしは半神たちのことを思う。  
そして、わたしはあの貴重な者たちを知っているにちがいない。  
あまたたび彼らの生命は  
わたしのあこがれる胸をときめかせたのだから。  
けれども、ルソーよ、あなたのように、  
魂がなにものにも打ち負かされずに

---

28) 『Der Rhein — an Isaak von Sinclair —』(1801)

強く耐えとおすものとなり、  
聞き語るための確固たる感覚、  
甘美な賜物を贈られた者、  
かくて彼が語れば、聖なる充実から、  
酒神のように愚かしく神的に、  
法則もなく、最も純粋なものたちの言葉を与え、  
その言葉は良き者たちには理解されるが、敬意を持たぬ者ども、  
神聖<sup>ぬほく</sup>をけがす奴僕どもには正当にも盲目的に打撃を加える、  
かかる見知らぬ姿として現われる者を、わたしはなんと呼ぶべきなのか？<sup>29)</sup>

アルプスの深い峡谷に狂り立ち、すさまじい咆哮をあげる半神“ライン”——ボーデン湖からドイツ側に落ちるシャッフハウゼンの瀑布の情景は、生みの苦しみ、束縛からの解放を求めてうめき、どよめきもがく半神の姿となって迫る。そして自由の身となった奔流ラインは、北を目指し、滔々と祖国ドイツの大地を育み流れる。ラインは最初東を目指したのだが、そのことは、『さすらい』<sup>30)</sup> や『ゲルマニア』<sup>31)</sup> にもみられる如く、文化の発祥地としての東方を思う詩人の心がこめられているのであろう。それにはギリシアへの愛も含まれている。こうしてここでは運命が、父なる最高者の意思を体して鍛えるものとして、積極的に肯定されているのである。

詩人は一転、人間界の半神ルソーを讃える。詩人のルソーに対する深い敬愛の念は、すでに『人類に寄せる讃歌』<sup>32)</sup> のモットー<sup>33)</sup>、オーデ『ルソー』<sup>34)</sup> や多くの書簡によっても知られ

---

29) 同上全15節の第10節目。因みに、連続する三つの詩節がそれぞれ一組を構成するトリアーデ方式で、この詩ではそれが五組もある大規模なものとなっている。またさらに、組と組との関係、また組から組への進行を或る意図に従って構成しようとする、詩人特有のディアレクティックな思考方法をその根底においているものであり、冷静に考慮された形式意思の裏付けをもつものである。

30) 『Die Wanderung』(1801)

31) 『Germanien』(1801)

32) 『Hymne an die Menschheit』(1791)

33) 前注の詩には、ルソーの『社会契約論』第3部第12章をモットーとして掲げている。

道徳界における可能なものの限界は、われわれが考えているほど、狭くはない。われわれの弱点、悪徳、偏見が、それらを縮めているのにすぎない。志操のひくい人々は、大人物を信じようとししないのだ。卑しい者達は、自由という言葉に、侮りの顔つきをして笑うのである。

J. J. ルソー

34) 『Rosseau』(1800)『ドイツ人に寄せる』(An die Deutschen) から派生して独立したもの。従って成立も1800年頃と推定される。

るところであるが、それらから伺い知ることが出来るのは、ルソーが多くのドイツの青年達を、そしてヘルダーリーンをどれほど鼓舞・激励したかを、——まさに、時代の英雄であったことを物語るものであろう。ルソーが歩んだ苦難の道を、いま、ヘルダーリーンも同じ想いで辿っているに違いない。だが半神のこの困苦は、やがてそれを超えて時代の夕べに、人間と神々とが婚礼の祝祭を祝う時のくることが待望されるからである。

このとき人間と神々は婚礼を祝い、  
生きとし生けるものはことごとく祝いに加わり、  
しばしのあいだ運命は  
調停されるのだ。  
そして亡命者は隠れ家を求め、  
勇者は甘いまどろみを求める。<sup>35)</sup>

畏友シンクレアに捧げられたこの詩では、最終節において初めて彼の名が呼ばれ、理想主義者で行動的な友への祝福と励ましの言葉によって全篇が結ばれている。つまり、実在の彼に呼びかけたことによって明らかなように、特に現世的なかかわりへの意欲に貫ぬかれた詩であるといえよう。

## (五)

先に名を挙げた『ゲルマニア』は、オーデ『ドイツ人の心が歌う』<sup>36)</sup>の詩想を豊かに展開した、代表的な祖国の歌である。ここでは、人類の文明の故郷を偲び、神々の影を求め、新たに大地を訪れるべき永遠の者たちを予感する。だが、ギリシアそのものへの憧れはもはや言われず、広い文化史的展望から、ギリシア、ローマを飛び巡り、そして遂に目指すゲルマニアの大地に降り立つ。

生气に充ちた時代の序曲はひびき、その時代に適うべく  
野は早くも緑する、祭壇への  
捧げのものは用意され、谷も河流も

---

35) 『ライン』の第13詩節の第1行目から第6行目まで。

36) 『Gesang des Deutschen』(1799)『ホンブルクのアウグステ公女に』(Der Prinzessin Auguste von Homburg)の詩の直前につくられたと考えられる。それと一緒に、公女の誕生日(1799年11月28日)に、清書して公女に捧げられたようである。

未来を告げる山々をめぐって広く開かれ、  
こうして遙かを見る者の眼は日の出る東方にまで注がれて、  
そこから歩み出るものの辿る道の多様な曲折がかれの心を動かしてやまないのだ。  
そればかりかエーテルからは  
愛に充ちた形象と数知れぬ  
神の言葉が降りそそいで 聖なる森の奥にこだまする。  
見よ、インダス河から飛来した鷲は  
パルナスの雪の頂きと  
イタリアの<sup>きさげ</sup>供犠の丘々の  
上空を飛びめぐり 父のために  
悦ばしい獲物を探し求める。昔よりいっそう<sup>たくみ</sup>熟達をました翼をふるって、  
年を経たこの猛鳥はついに  
アルプスを越えて見おろす、美しく列なる郷々を。<sup>37)</sup>

先述のオーデ『ドイツ人の心が歌う』とは約三年の経過の後出来上がったものであり、自由韻律の壮大な讃歌へと成長し、生まれ変わったものと云える。神話性にまで高められた思想と祈念の深さを感じさせずにはおかない。《神のもっとも静かな娘》<sup>38)</sup> ゲルマニアが、今後の世界において負う使命が語られる。彼女が果たすべき使命の中核は、《聖なる大地》の名を云い、自然の生気を現代によみがえらせることにある、と云えよう。

そしておんみが夢見ているあいだに ひそかに  
眞昼のうちに別れを告げながら ひとつの友情のしるし、  
口の花をおんみに残し、そしておんみは孤独のうちに語りつづけた。  
しかしゆたかに溢れる金色の言葉の数々を  
幸あるおんみは、もろもろの河流とともに注ぎ送って、尽きることなく  
国の隅々をうるおしている。まことに、  
万物の母にして  
常には“身を隠しているもの”と人間たちから呼ばれているあの聖なる大地に  
ほとんど変わらず、

---

37) 『ゲルマニア』(注31参照)の第3詩節。特に、ここでの鷲の飛行の道は、人間の文明の形式の諸段階を示している。

38) 娘“ゲルマニア”はドイツを象徴する神的な女性。

愛と悩みに

かすかすの予感に

そして平和の思いにおんみの胸は充ちている。<sup>39)</sup>

「真昼のうちに」、つまり、まだ文明の夕べの来る前に、《口の花》なる言葉、即ち、文明・文化の源泉が溢れ流れて、聖なる大地、祖国ドイツの国土を豊かに充たしていく——詩人の希いは、聖なるゲルマニアの大地が、自然の生气に充たされ、過ぎ去った神性が再び響きを発し、そして、遙かな時と場所から未来の光が、愛と喜びとともに輝き、語りかけてくることを、全生をかけて、《至高の霊》の前に祈りを捧げる。

しかし過去にも未来にも属さぬ『時』の中央には

乙女にも似た清らかな大地とともに

エーテルがやすらかに生气を湛えている、

そしてその昔を偲んで寡欲の神々たちは

喜んで賓客となる、寡欲の民のもとに、

おんみの祝いの日に、ゲルマニアよ。

おんみはその祝いの司祭なのだ、

そして武具をもたぬ身で忠言を贈るのだ

四方の王らと民たちに。<sup>40)</sup>

《過去にも未来にも属さぬ《時》の中央》とは、時間が常に《現在》という中央であり、生气に充ちた安らかな、平和な時空である。昔の権勢や崇拜されることを求めることがなくなったギリシアの神々、その神々が外的な野心を持たないドイツの民の客として、招じ迎え入れられる。《武具をもたぬ身で》と云っているのは、ひろく世界の中でのドイツ文化の位置に対する、詩人の内なる認識、自覚が云わせたものであろう。当時のドイツは政治的に、無論それにつれて外交的にも経済的にも、後進国にすぎなかったのだが、しかし文化的諸力においては、すでに確固たる基盤を築いていたのである。即ち、カントを頂点とする理想主義哲学、ゲーテを中心とするヒューマンイズムの文学、バッハを始祖とする近代音楽は、世界

---

39) 同第5詩節の第6行目から第16行目（詩節末）まで。

40) 同第7詩節（最終詩節）の第7行目から第16行目（詩節末）まで。尚、この最終行の「四方の王らと民たち」は、『世界』を意味する表現で古くからあり、ローマの詩人リーウィウスにも見出されるという。

の頭脳と心情に支配的な影響を及ぼしたのである。この道だけが、ドイツの進むべき道であることを深く思念するのである。それによってドイツが、世界の宥和の要めとなり、礎となることを、詩人はひたすら願うのである。その目標をかかげて、詩人はおのが国民を励まししているのである。

ヘルダーリーンの詩業の頂点をなす後期讃歌群、既存の韻律の型によらない自由韻律によって、「祖国」や「時代」を主題に、至高のものを讃える荘厳な歌が生み出され、それは人々をしばしば感激と陶酔にまで高める。それらの一群をバイスナーが《祖国の歌》<sup>41)</sup>と命名していることも、詩人の意を適確に汲んでいるものと、これまで省察してきたところからも首肯される。既述した如く、「祖国的形式」とは既存の定型詩や古典的詩形を経て、後期の讃歌群に見られる自由韻律の詩形を云い、貧しい時代の中における生みの国のありさまと、それが何をなすべきかに思いをひそめ、時代を愛すればこそ祖国を愛し、そこに眞の宥和を実現しようとする本源的な動機をもつ、ヘルダーリーンの独自の祖国回帰の讃歌にほかならない。

これらの詩は詩節に分かれており、各詩節に何らかのきまった韻律が課せられるということではなく、それぞれの詩行は、自由な形で歌われる。自由であるが故に、ヘルダーリーンの独自のきびしさによって表現の緊張度は、いよいよ高められていく。それには複合語の多様やペリオード<sup>42)</sup>の強調がみられ、詩型の多くにはトリアード<sup>43)</sup>によって壮大に構成され、そしてドイツ語の内包するリズムの豊かさが、そこに有機的な統一を図っているのである。またそこにもみられる内在的な断片性が、詩の緊張性をいやが上にも高めているのである。それはいわば、「調和を求めようとする統一の原理」を破って解体へと向かおうとする断片の力、その断片が己の姿をありのままに、自らの瓦解を賭して確保しようとする統一の力——まさに、このような文芸のありかたそのものにこそ、近代文芸の本質と固有性を見出すことが出来よう。『唯一者』<sup>44)</sup>や『パトモス』<sup>45)</sup>には、神々の世界とキリストを結ぼうとする、ヘルダ

---

41) 元来、讃歌（ヒュムネ）という名称はヘルダーリーンのつけたわけではなく、後人がこの名で後期の彼の大作を総括したのである。この壮大な自由韻律の詩群を、バイスナー（注13参照）はその編集したヘルダーリーンの大全集で、《祖国の歌》と命名したのである。ヘルダーリーンの出版者ヴィルマンズに宛てた書簡（1803年12月）の中で、「まだ小児に似ているわれわれの文化の狭い棚の中に読者と共にはいる」ことを喜びとし、「高い純粋な喜び」に躍る“祖国の歌”について云っていることから、詩人の意を汲んで後期の大作にこの名称を冠したのである。

42) *Peliod*. 二つから四つまでの *Kolon* からなる詩のリズムの単位。

43) *Triade*. 古代ギリシアの讃歌または悲劇の合唱歌の *Strophe*, *Antistrophe*, *Epode* からなる三連構成。注29参照。

44) 『*Der Einzige*』 全三稿のうち第一稿は1802年秋に、第二稿と第三稿は1803年夏と秋に成立したものと推測される。三稿とも、詩としては完成に遠いが詩人の経路をうかがう上には、この上もなく重要なものと云えよう。

ーリーンが全身全霊をかたむけて立ち向かった問題——その悲痛な試みによってどの稿にも苦渋と苦闘が滲み出ているであろう。つまり、詩人個人の悲しみとして、このように表白されているものは、実は思想と信仰の全てにかかわる人類の難問にほかならない。それ故にわれわれの心を強く揺り動かすものは、このような詩作へ衝き動かされたヘルダーリーンの切迫した内面の状況であり、常により大きい調和と、より高い愛に向かう彼の全一的且つ弁証法的な思考も、その心情的根源はまさにここに在る。

聖なるものを招来しようと讃歌を詩い続ける行為それ自体が、詩う者を死の深淵へと追いつめていくのであろうか。生涯を詩作において、人としての肌合いとの触れ合いを、理解の根底に置くことを不動の指針としてきた詩人、大いなる愛の詩人ヘルダーリーンに、果たしてなにびとが、まことにキリストの生涯にも似た犠牲を求めたのであろうか。詩人の精神がくず折れようとする前の、最後の大作といわれる『パトモス』において、キリストの死後の使徒たちのありさまが描かれ、至高者の意志として、夜の時代に「生命」を語り伝えるべき「詩人の務め」が明らかにされていく。キリストの死がその歴史的意味において解き明かされるのである。

神は近きにあつて  
しかも捉え難い。  
だが 危険のあるところ、そこには  
救いの力もまた育つ。  
暗黒のなかに鷲は棲み、  
恐ろしげもなくアルペンの子らは  
深淵を越えて  
危うく掛かる橋を渡り行く。<sup>46)</sup>

---

45) 『Patmos』(1802) 全15詩節。1803年2月6日にヘルダーリーンが、ホンブルク方伯フリードリッヒ五世に献呈したことを、宮廷の高官でもある親友シンクレアーが告げている。彼の大変熱意ある斡旋によって詩人は1804年6月より、形式的にはあるが、宮廷司書の転についている。パトモスは小アジアの海岸に近い小島。12使徒の一人ヨハネは小アジアに行き、エベソスに定住し、のちパトモス島に流されて、そこで『ヨハネの黙示録』を書いたと伝えられている(使徒ヨハネと黙示録のヨハネとの同一性は証明されていないが)。『ヨハネの黙示録』Ⅰの9。「あなたがたの兄弟であり、ともにイエスの苦難と忍耐とにあずかっているわたしヨハネは、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。」

46) 『パトモス』(前注45参照) 第1詩節第1行より第8行まで。

導入部の異常なまでの力感と意味の深さには、圧倒されるばかりである。張りつめた音調と心情の深さに、いまさらのように驚嘆させられるのだが、特に最初の二行のピンダロスの箴言の衝撃力ははかり知れないほどで、この二行だけで、この詩はわれわれに忘れ難いものとさせるのではないだろうか。宥和と愛を旨とするキリストの心が歌われ、祖国ドイツの現実を思うことからドイツの歌が生まれ、そして、この世の根底にあって大いなる宥和をあらしめるものを《持続するもの》と言明している。この詩の重要なモチーフの一つとも云えるこの言葉は、この詩が成立した後まもなく作られた『追想』<sup>47)</sup>での《留まるもの》という意味深い結尾語と相応して、対照的に捉えることが出来るのではないだろうか。

やがて迫りくる精神の闇路を前にして、

“だが、留まるものをうち建てるのは詩人だ”<sup>48)</sup>

と、近代固有の詩的表現である《祖国の歌》の確立を試みながら、ヘルダーリンはこのような近代の刻印としての芸術のかたちを追及し、おのれの詩の可能性を絶えず問い続けたのである。眞に時代を更新する希いから、問いが発せられていくのである。

《芸術が生命を持ち続ける為に、究極的に重要なことは何か?》と。それをヘルダーリンは、現代のわれわれに対しても、彼の詩のありかたそのものと、不曉不屈の詩業で貫ぬかれたその生涯によって、教えているのではないだろうか。

完

---

47) 『Andenken』(1803) ヘルダーリン最後の任地であり、またそこからの帰路も謎めいている仏ポルドー、かの地を機縁として本源を追想し、また自分は本源の近くにいる者として、遙かなる友らも根源への追想を必ずするであろうことを云ったのである。

48) 「追想」全5詩節の最終詩節の最終行(第11行)。「留まるもの」は維持するもの、本源の地にあって揺るがぬもの、母国への愛、人々への愛等どのように解釈することも許されるだろう。そして詩人は、ここでまた詩人のなすべき究極の事業に思いを深めるのである。なお、この詩には詩人が後に手を入れた三種の稿がある。



## テキスト

- 1) Friedrich Hölderlin. Sämtliche Werke. Grosse Stuttgarter Ausgabe I-VIII. Friedlich Beißner. Stuttgart. Kohlhammer. von ab 1946.
- 2) Friedrich Hölderlin. Sämtlich Werke. Frankfurter Ausgabe 1 -17. D. E Sattler. Frankfurt a. M. Roter Stern. von ab 1978.
- 3) Friedrich Hölderlin. Die neu zu entdeckende hymnische Spätdichtung bis 1806. Dietrich Uffhausen. Stuttgart. J. B. Metzler. 1989.
- 4) Hölderlin. Eine Chronik in Text u. Bild. Adolf Beck u. Paul Raabe. Frankfurt a. M. Insel.1970.
- 5) Internationale Hölderlin Bibliographie 1904-1983. 1984-1988 I .II. 1989-1990 I .II. 1991-1992 I .II. Maria Kohler. Stuttgart. Frommann Holzboog. von ab 1984.
- 6) Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin I .II. Winfried Lenders. Tübingen. Max Niemeyer. 1983.
- 7) Kürschners Deutscher Literatur-Kalender 1998 I .II. Andreas Klimt. München. K. G. Saur. 1999.

〈文献〉

- 1) Ulrich Gaier. Hölderlin, die Moderne und die Gegenwart. S.9-40. In:Hölderlin und die Moderne. von Gerhard Kurz. Attempto. Tübingen. 1995.
- 2) Dietrich Uffhausen. Bevestigter Gesang. Hölderlins Späthymnen in neuer Gestalt. S.126-152. in : ibid.
- 3) Gerhard Kurz. Winkel und Quadrat. Zu Hölderlins später Poetik und Geschichtsphilosophie. S.280-299. in : ibid.
- 4) Thomas Roberg. Fridrich Hölderlin. Neue Wege der Forschung. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstat. 2003.
- 5) Peter Szondi. Hölderlin-Studien. Insel. Frankfurt a. M. 1967.
- 6) Adolf Beck, Paul Raabe. Hölderlin. Eine Chronik in Text und Bild. Insel. Frankfurt a.M.1970.
- 7) Ulrich Häussermann. Friedrich Hölderlin in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Rowohlt. Hamburg. 1961.
- 8) Walter Müller-Seidel. Probleme der literarischen Wertung. J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung. Stuttgart. 1965.
- 9) 手塚富雄, 手塚富雄著作集 I . II . 中央公論社, 1981。
- 10) 手塚富雄, 手塚富雄全訳集 I . II . 角川書店, 1971。
- 11) 手塚富雄他, ヘルダーリン全集 1 , 2 , 3 , 4 , 河出書房新社, 1966。(本稿中で引用した書簡及び詩の翻訳文は大部分を本全集より引用させて戴いた。ここに銘記して心より謝意を申し上げます。)
- 12) 谷友幸, ドイツ文学論考, 郁文堂, 1982。
- 13) 小牧健夫, ヘルダーリン研究, 白水社, 1953。
- 14) 会津伸, ミューズの子とともに——近代ドイツ抒情詩論——松籟社, 1984。
- 15) Walter Horace Bruford 著, 上西川原章訳, 18世紀のドイツ——ゲーテ時代の社会的背景——, 三修社, 1978。
- 16) Christoph Jamme, Otto Pöggeler 著, 久保陽一訳, ヘーゲル, ヘルダーリンとその仲間——ドイツ精神史におけるホンブルク——, 公論社, 1985。